

## レーザーコンパス

## 基礎研究への投資

伊藤光男\*

Mitsuo ITO\*

今や日本の基礎研究の水準は非常に高くなり、あらゆる分野で世界に伍する状態にある。一方、日本の基礎研究が外国にくらべて創造性、独創性に欠けることがしばしば指摘されている。これは極端な言い方かも知れないが、量はまあまあだが質が問題だということであろう。日本は量産態勢をつくるのはたいへんお得意とし、グループをつくり皆んなで力を合わせてせっせつと物づくりに励み、日本を今日の経済大国にのしあげてきた。これは大変な偉業であることは誰も認めるところである。しかし経済的には豊かになったが、はたして日本が世界から尊敬される国になったかどうかは大いに疑問である。

これは日本の基礎研究にも通ずるように思う。私の属している物理化学の世界でも日本の研究者による一流の国際学会誌への論文発表数は非常に多く、分野によってはアメリカに次いで2位である場合が多い。これは日本の基礎研究が量のみならず質も著しく向上していることを意味し喜ばしい限りである。これは日本の研究者の健闘の賜であるが、基礎研究に対する科学施策の大きな成果であるといえる。

基礎研究の研究者にとって文部省の科学研究費が最大の資金源であり、文部省及び関係者の努力で近年大幅な伸びを示し、今や1000億円に迫ろうとしている。科研費の項目配分で気づくことは、重点領域研究、特別推進研究、新プログラムによる研究等、いわゆるグループ研究やプロジェクト研究の予算の割合が非常に高く、一般研究の予算額にはほぼ匹敵していることである。現在まともな研究活動をするにはこれらの

グループ研究やプロジェクト研究に加わらなければできないのが現状ではなからうか。グループ、プロジェクト研究重視の施策は特定分野を強化し研究水準をあげるのに大いに役立った。これは官民あげて経済大国を築いた政策に似ている。しかし真に独創的、先駆的研究がこれらのグループ、プロジェクト研究から生まれたということはあまり聞かない。独創的研究は個人の自由な発想から生まれ、それに基づいた意外性が科学の発展に最も貢献していることは過去の歴史が示している。グループ、プロジェクト研究は目的指向の色彩が濃く意外な方向への発展はむしろ抑制するように働き、個人の独創性を否定しかねない。

現在日本の基礎研究に求められているのは独創性であることは耳にタコができる位に聞かされ、われわれもその通りだと思っている。それにも拘らずグループ、プロジェクト研究が大いに奨励されるのは何故であろうか。金を出す側からするとグループ、プロジェクト研究の場合、その成果を目的達成度という形で確実に得ることができるが、意外性を期待する個人研究は賭けみたいなもので投資する気にならないのであろう。しかし意外性の発見が世界を変えるものであることを考えるとき、この賭けこそが重要ではなからうか。この意味で科研費一般研究は独創的な研究を生みだすのに不可欠でありその一層の充実が望まれる。いつか世界を震撼させるどでかい発見がでるであろう事を夢みながら、個人の自由な発想に思い切って投資するという應揚な科学施策が日本を真の科学大国に成長させるのではなからうか。

\*分子科学研究所(〒444 岡崎市明大寺町西郷中38)

\*Institute for Molecular Science (38 Nishigo-naka, Myodaiji-cho, Okazaki 444)